



## 第3回国際経穴部位標準化に関する 非公式諮問会議報告

形井秀一 浦山久嗣 篠原昭二  
小林健二 坂口俊二 河原保裕

### I. 第3回会議について (形井)

標記のように第3回京都会議が開催された。

今回の開催は日本がホスト国となり、北京での第2回会議(2004年3月17日、18日)以降、準備を進めて、開催に至った。

この間、1. 経穴部位の検討、2. 参加者の受け入れ準備、3. スムーズな会議運営の準備、が行われ、それが、4. 討論内容と決定事項に成果として結実した。

これらに関して、京都会議に参加した第二次日本経穴委員会作業部会のメンバーに、担当項目を決めてまとめてもらい、また、参加した感想も綴ってもらった(なお、作業部会委員の香取俊光氏は所用のため京都会議は欠席した)。

会期 2004年10月12日(火)~14日(木)

会場 明治鍼灸大学 8号館F (京都府船井郡日吉町保野田ヒノ谷6)

参加者

#### 1. WHO西太平洋地域事務局 (WPRO)

(1) 崔昇勳 (チェ・スンファン)

伝統医学諮問官

(2) ナイゲール・ワイズマン

ナチャングェン・グアン大学教授

#### 2. 中華人民共和国

(1) 王雪苔 (ワン・シェタイ)

WFAS (世界鍼灸学会連合会) 名誉会長

(2) 黄龍祥 (ファン・ロンシャン)

中国中医研究院教授

(3) 司徒穩 (スートー・ウェン)

中医学国際部

#### 3. 大韓民国

(1) 姜成吉 (カン・ソングル)

慶熙大学教授

(2) 金容奭 (キム・ヨンソク)

慶熙大学教授

(3) 李恵貞 (イ・ヘジョン)

慶熙大学校東西医学大学院教授

(4) 任允卿 (イム・ユンギョン)

大田大学

#### 4. 日本

(1) 形井秀一

筑波技術短期大学教授

(2) 小林健二

北里大学客員研究員

(3) 浦山久嗣

経絡治療学会学術部員

(4) 篠原昭二

明治鍼灸大学教授

(5) 坂口俊二

関西鍼灸大学助教授

(6) 河原保裕

日本鍼灸師会学術局経穴委員

#### 検討事項

事前にWPROの崔氏から送られてきた検討予

定内容は以下の4点であった。

1. 同意穴と非同意穴の確認
2. 英訳基準の確認
3. 標準経穴図譜の検討
4. WHOの最終会議の日程の検討

しかし、実際は、1番の中の非同意92穴に関する検討のみを行って会議は終了した。

## II. 経穴標準化のための事前の検討、 そして、京都での検討会議 (浦山)

北京・3月

北京の春は風がやや冷たかったものの、大変穏やかだった。ろくに準備もできない状態で慌しく乗り込んだ会議場は、国際会議に相応しい重厚さと友好的誠意に満ちていた。会議は、白熱した議論の末、いくつかの合意を得、多くの宿題を残して閉幕した。

帰国の前に見学させて頂いた、中国中医研究院の付属鍼灸院では衝撃を受けた。そこには日本人を含む多くの外国人(アメリカ人が多かった)が研修しており、研修生のほとんどが短期間で帰国して臨床に従事するという。彼らの熱心さに圧倒され、その情熱をしっかり受け止めて丁寧に指導する教授陣にも感心した。環境も文化も言語も異なる彼らを、短期間で臨床ができるまでに指導しなければならないとしたら、指導者にはどれほどの力量が必要なのだろうか。

現在、中国ではすでに国定の統一教科書があり、外国人向けの英語版も用意されているが、それが直ちに世界共通の学術用語として通用しているとはいえない。研修生たちが母国で臨床をし始めたとき、果たして、近隣の同業者との情報交換が可能なのだろうか。

世界中にはいったい何人の鍼灸師がいるのだろうか。その誰もが自分の勉強したテキストや

臨床経験のみを信じて他の情報を受け入れることがなかったら、鍼灸という文化や学術は成り立つのだろうか。他人に理解できないカルテを残しても何の意味もなく、結局は自分の役に立たないことになりはしないだろうか。

鍼灸医療の有用性は世界の歴史が認めるところであるが、その多様性と汎用性の故に共通理解が困難になりつつあり、共通語としての基準作りが急務であることを実感させられた会議でもあった。

大塚・5月

4月の末に第二次日本経穴委員会が発足し、5月23日に大塚の日本鍼灸会館に作業部会のメンバーが招聘されたとき、最初に浮かんだ思いは「世間は狭い」だった。

形井委員長、篠原副委員長、そして小林委員は北京会議での同士であり、群馬県立盲学校の香取委員と北里東医研医史研部長の小曾戸委員もすでに医史学系の学会で顔見知りだったのである(小曾戸委員は日本東洋医学会代表の座を小林委員に譲り、この後は直接会議に参加することはなくなった)。

東京衛生学園講師の河原委員と関西鍼灸大学講師の坂口委員とは初対面だったが、会議を進めて行くうちに、お二方とも俊英振りを随所に垣間見させた。

会議は、これまでの経緯の説明と今後の会議の進め方についての討議で終わったが、各自で作業を分担して行う宿題が課せられた。

割り当ては、坂口(中府～臂臑、肩髃～築賓)、篠原(肩髃～不容、陰谷～勞宮)、河原(承滿～内庭、中衝～聴会)、形井(厲兌～大包、客主人～維道)、香取(極泉～聴宮、居髎～足五里)、浦山(晴明～大腸兪、陰廉～頤会)、小林(関元兪～胃倉、上星～承漿)と決まった。

## 大塚・7～10月

以下に、作業部会の議事録の一部を要約してご紹介しよう。

## ○第3回会議

日時：2004年7月25日(日) 10:30～17:00

場所：日本鍼灸会館

出席者：形井・篠原・小林・浦山・香取・河原・坂口

オブザーバー：山口 (医道の日本社)

作業内容：3カ国の取穴位置について日本側の見解を各委員の作業結果をもとに検討。その結果、各国共通穴269穴 (日本側非同意穴92穴) となり、これを中国に提示することと決定。

確認事項：北京会議では任脈の中庭から臍 (神闕) までの距離が「8寸」と決まったが、肋骨の形状 (特に肋骨角の角度) に個人差が大きいいため、胃経の不容・承満・梁門の取穴が曖昧であり、検討を要する。

会議終了後：医道の日本社主催の座談会「鍼灸臨床における経穴の意義について」に出席し、経穴の標準化作業の苦労や作業による新発見、今後の課題などについて話し合った。

## ○第4回会議

日時：2004年9月12日(日) 10:30～17:30

会場：日本鍼灸会館

出席者：形井・篠原・小林・浦山・香取・河原 (欠席者：坂口)

オブザーバー：石井 (医道の日本社)

経過説明：①中国側から提出される共通269穴の日本語訳の内容確認をする予定だったが、中国側にメールが届いていないことが判明したため作業が遅れている。8月末に中国側に日本案を再提出 (確認済み)、日本案を踏まえて9月末までには中国が検討結果を提出の予定。

②WPROの崔昇勲氏より国際会議 (京都会議)

の招聘状が届く。会議では「a. 3カ国が同意した経穴の確認」と「b. 非同意の経穴に対する1穴ずつの検討」を行う予定。

作業内容：非同意穴の日本案を作成 (92穴中17穴)。

今後の予定：9月23日と10月11日 (国際会議前日に宿泊先で最終打合せ)。作業が遅れそうな場合は10月3日にも臨時の委員会を召集する。非同意穴は委員会で、同意穴はメールで内容を検討。各自が事前に十分な検討を行い、委員会では1穴5～6分で終了するように努力する。各担当者は残った非同意穴の案を再確認しておくように。

会議というものは予定通りには行かないものである。9月は作業部会を2回も行ったにもかかわらず予定は遅れた。そこへ中国側から同意穴 (何故か294穴になっている) の検討結果が入ってきた。確認してみると日本案を考慮した内容ではなく当初予想していたものとは違っていたため、これまでの作業を打ち切って中国案を分担して翻訳 (委員だけでは時間が足りず、内経医学会の左合昌美先生と荒川緑先生にもお手伝い頂いた) し、10月3日と11日は中国案の内容検討に当てることになった。

## 京都・10月

10月11日13時、JR山陰線園部駅。台風一過というほどの秋晴れではないが、穏やかな日差しが入る喫茶店の個室を占領して、本番前の最後の会議が始まった。10月3日の臨時会議では中国案の確認を駆け足で行ったが、急ぎに急いでも半数に及ばなかった。プロジェクターを持ち込んで部屋の壁に、みんなで翻訳し終えたばかりのデータを映し出し、いざ戦闘開始である。思ったよりも確認作業はスムーズに運び、午後3時を過ぎたあたりで全体の3分の2ぐらいま

で進むことができた。さあもう一息というところへ中国の代表団やWPROの崔氏が到着して作業は度々中断されたが、その後も順調で、夕食前には4分の3を超えていた。

夕食は中国側と約7カ月ぶりの再開を喜びながらのささやかな会食となった。その間、韓国の代表団の到着がまだだったことに気を揉んでいたが、夕食も半ばを過ぎた頃になってやっと到着し、胸を撫で下ろすことができた。

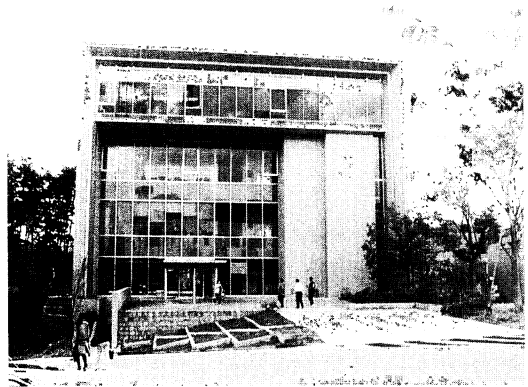
夕食後、ホテルの一室に再び集合して最後の確認作業を行い、作業を終えたときには午前0時を回っていた。旅程の疲れも相まって、翌朝から本番の会議が始まるというのに、すでに疲れ切ってしまった。

本会議で「同意穴の確認」を後回しにして「非同意穴の検討」から行われようとは予想しておらず、これまでの確認作業がまったく役に立たなくなるなどわかるはずもなかったのである。そのときはまだ、予習を完全に終えているという安心感と充実感のなかで、ただただ心地よい眠りに落ちて行っただけであった。

### ■ Ⅲ. 非公式諮問会議の運営の 準備を担当して（篠原）

しかるべき施設での開催？！

北京大会の折り、日本での開催は大学等のしかるべき研究・教育機関で…という意向があった。そこで形井委員長と相談し、筑波技術短期大学あるいは明治鍼灸大学のいずれかで、という話で検討を進めた。しかし、北京大会を経験して、空港からホテルまでの送迎や2回の懇親会、快適な会議場等種々の準備が必要であると思われた。結局、明治鍼灸大学でしようとの形井委員長の決定で、大学で実施することとなった。矢野忠・全日本鍼灸学会長も大学で開催の方がよいのではないかと、とのコメントを



会場となった明治鍼灸大学8号館

いただいていた。

京都市内か大学か？

一方、明治鍼灸大学は「京都」とはいえ、京都市内にあるわけではなく、京都駅からさらにJRで1時間を要する場所に立地している。そこで、京都駅前のホテルに宿泊し、1日目と3日目は京都駅前のキャンパスプラザ京都を会場とし、中日の2日目は明治鍼灸大学で実施してはどうかという案を作成した。3日間ともキャンパスプラザで実施しても良かったが、あいにく中日だけは会場が予約できなかったことによる。往復のバスは、約1時間かかるが、京都駅前のホテルは、何かと便利が良く、中国、韓国の代表者にとっても、魅力的な場所とも思われた。

会議最優先の運営を！

しかし、この案に対してWPROの崔氏から、「会場は3日間とも同じ場所にして欲しい」「何よりも内容の検討を第一義とした計画案を立てて欲しい」「ホテル等については、その良否は大きな問題ではない」等のコメントをいただき、結局、3日間とも明治鍼灸大学で実施することとなった。京都市内での実施は、理想的ではあるが会場費等を考慮すると潤沢とはいえない第二次日本経穴委員会の予算では、とても運営で

きるものではないと思われた。

### リーズナブル(?)なホテル

問題は大学近隣の宿泊施設である。いろいろ調べては見ても、帯に短し襷に長し。旅館でも良い、というコメントも戴いたが、旅館の方が値段は高く、距離も離れることから実現できなかった。ちょうど、去年くらいにJR園部駅にビジネスホテルがオープンしていることを矢野教授から伺っていた。実際に訪ねてみると部屋は全部で17部屋。全部借り切ってしまうと、会議参加者全員を泊めることが可能である。そこで交渉してみると、担当者の方が親切に対応して下さり、積極的に協力いただけることとなった。しかし、都会のビジネスホテルとはどこか違う。部屋は、結構ゆったりした造りであるが、ホテルらしくないホテルでもある。フロントも、小さな部屋があって1人のフロントマンがポツリと居るだけである。いろんな無理難題にも、親切に応じてはくれるものの、どこか開放的な空間で、駅との通路から自由に出入りできること、ホテル単独の閉鎖空間でないことなどが、違和感の要因と思われた。また、部屋代は6400円であるが、京都駅界隈でも十分泊まりうる値段である。値段の割には……という感がないでもないが、ホテルの名前が「ビジネスホテル・リーズナブル」であり、会議のレセプションでは、「リーズナブルなホテル」(!?)ということで、話題にもなった。

しかし、毎朝朝食から夕食、チェックインまで、ほぼ全員が同じ顔ぶれで行動をとめたことは、間接的に会議のスムーズな進行に貢献していたのかも知れない。

### 空港からの送迎

一番早く来日のスケジュールを教えていただいたのが韓国のメンバーである。したがって、空港から園部のホテルまでの手配はスムーズに

行うことが可能であった。次に問題となったのは、WHOの2人のメンバーである。到着時間が遅く設定されていたために、少し早めの到着便への変更をお願いしたり、何かと手間取った。さらに、ナイゲール・ワイズマン氏の場合は便名を変更された連絡が休日の土曜日にメールで連絡いただいていたため、小生の方で把握できていなかった。そのため、迎えの予約便はキャンセルとなり、ワイズマン氏は、苦勞して園部まで単独でお越しいただくこととなってしまった。

最も問題となったのは、中国の参加者である。いつまでたっても到着便の連絡がない。結局日曜日になって初めて到着便の連絡が入ったものの、前日では、シャトル便等の手配が出来ないことから、JRを使っての心細い旅をお願いする運びとなった。「京都駅でいろんな人に英語で聞いても、誰も教えてくれない…」と、開口一番、不安と不満の声が囁かれた。

しかし、会議前日の夜には、全メンバーがホテルに集まったことは何よりのことであった。

### 会場設営

会場の設営については、大学事務局の全面的な協力を得て、非常にスムーズに行うことが可能であった。ホテルから大学までの送迎用のマイクロバス、お昼の弁当の手配、休憩の湯茶の接待から会議中のペットボトルの水など、細かな配慮をいただいた。

また、名札やネームプレート、会議の看板、資料ファイルの作成等は、大学・東洋医学基礎教室の和辻助教以下の方々の並々ならぬ協力によるものである。しかし、名札とネームプレートは崔氏が当日持参され、急遽差し替えることとなってしまった。また、準備すべき資料についても事前に細かな連絡があるわけではなく、形井委員長と相談して種々準備をせざるを得なかつ

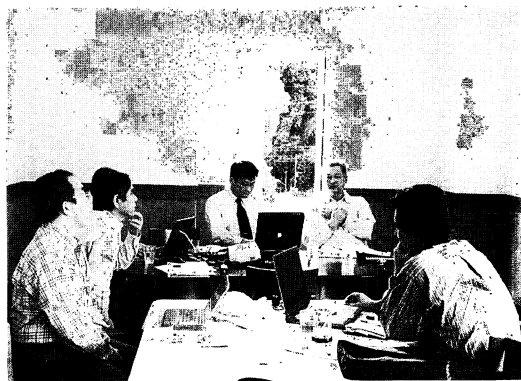
た。

会議期間中は2人の教室員が待機して、記録や種々の調整を行っていただいた。また、記念写真のプリントや会議風景のCD版写真集も、解散前に全員に手渡すこともしていただいた。

また、液晶プロジェクターを使ったプレゼンテーションのために、コンピューターを4台まで同時接続して、自由に切り替えられるような準備もしていただいた。今後こういった運営が積極的に行われるものと思われる。

#### 会議を終えて

会議メンバーをバスで見送ったときには、ほっと安堵の息を吐いた。会場の片づけは、事務局の職員の協力で短時間の内にスムーズに現状復帰され、3日間の会議の余韻も跡形もなく、消失した。果たしてあれで良かったのかどうか、不備はなかったかどうか、もっと準備すべきではなかったか等、種々頭を駆けめぐるが、できるだけの準備はさせていただいたと思うし、何よりも、栗山学長はじめ、矢野学部長、川喜田研究所長、北小路鍼灸センター長等、多くの教員の助言や励ましもいただき、何とか無事に終了することができたものと思われた。今回の会議の成果が、よりよい方向でさらに発展することを祈らずにはられない。



前日はホテルの喫茶室で会議を行った

## IV. 経穴標準化検討ための準備、資料作り (小林)

### はじめに

どんな会議でも当然であるが、事前の資料をまとめておけば会議はスムーズに行く。さて今回の会議のメインテーマは「歴史と現実」と言う相反する事項を統一する作業である。矛盾を解消するには最大限の資料の検討を要する。では資料はあるのか？ 第一次日本経穴委員会で作成した『経穴集成』、『標準経穴学』がとりあえずある。しかし、なんでもそうであるが、あるからといって信用してはいけない。金科玉条としてはいけないのである。一度自分で同じことをやってみて、そのうえで資料として使うのであれば役に立つという立場でなければいけない。上記2書への信仰心と批判精神をもってあたることを信条として資料を作っていく方針で作業にあたった。

### 何を資料としてまとめたか

作業は、結論からいえば本年3月の北京での会議で決議された「歴史と現実を尊重するという基本的な考え方に基づいて」という基本方針で資料を収集・整理するということであった。具体的に文献の選択では、『黄帝明堂経』、『甲乙経』、『千金方・明堂』、『銅人腧穴鍼灸図経』や現代の国定標準経穴部位などが会議で選ばれているが、パソコンのデータとしては『黄帝明堂経』(黄龍祥・輯校)以外はデータベース化してあったので、どうにか作業部会に、まとまった形で渡せる準備は整っていた。しかし、北京の会議で渡された英語と中国語で書かれた日本・中国・韓国の3カ国の国定標準経穴書の経穴部位の日本語訳がない。これをもとに次回の会議(京都)が行われるとあって、中国語を日本語に訳さないとどうにもならない。

とりあえず至急やるしかなかったのだが、なぜかこの作業を全面的に請け負うことになった。実際に訳し始めると、これはなかなか簡単なものではなく、「僧帽筋」は中国語でも「僧帽筋」と思いきや、「斜方肌」という中国語になっている。「肌」が「筋肉」とは文化の違いはおもしろい。感心していても先には進まないで、とにかく作業作業で毎日追われた。デスク周りは常に解剖書、中国語の辞書、日本・中国の経穴学教科書数十冊で埋まり、置き場がない本は床に置いて作業を進行。解剖学書は『日本人体解剖学』(南山堂・金子丑之助著)、『人体解剖図譜』(上海科学技術出版社)、中文と英文で鍼灸のことが書かれている本では『漢英双解針灸大辞典』(華夏出版)などを参考に、あちらを見てはこちらを見、こちらを見てはこちらを見るという繰り返してパソコンデータとして約1カ月以上かかり作業終了。これをメーリングリスト(5月24日開設)を使って部員に配布。各自印刷するなり、パソコンで検討するなりという方法で行ったため経費(郵送料・コピー代など)は最小限に抑えられた。

実際に部会で使う資料として、日本・中国・韓国の3カ国の経穴部位比較一覧と古典の『甲乙経』以下数冊のテキストデータベースをひとつにしたExcelファイルを使用した。内容は具体的にいえば、以下のようなった(以上4~5月の準備)。

- ・中国経穴学の日本語訳(国定教科書)
- ・韓国経穴学の日本語訳(国定教科書)
- ・標準経穴学(医歯薬出版)
- ・経絡経穴概論(東洋療法学校協会・医道の日本社)
- ・基礎理療学〈経絡経穴概論〉(盲学校理療教科用図書編纂委員会)
- ・鍼灸甲乙経・巻3

- ・黄帝内経明堂・楊上善
- ・千金要方・巻29
- ・千金翼方・巻26
- ・外台秘要方・巻39
- ・素問・王冰注
- ・医心方・巻2
- ・銅人腧穴鍼灸図経・巻上
- ・銅人腧穴鍼灸図経・巻中
- ・銅人腧穴鍼灸図経・巻下
- ・鍼灸甲乙経・黄龍祥新校本
- ・黄帝内経明堂・小曾戸丈夫本

6月になり、手を(眼も)休める暇もなく、経穴部位の図版資料として韓国の経穴書(浦山氏提供)、中国の国定標準経穴書、日本の標準経穴学の図版もデータベース化しなければ不便というわけで一気に作業を行った。図版をスキャナーで読み、画像処理の毎日。絵と図は万国共通なので、どんな難しい表現でも1枚の絵図があれば誰でも理解できるので説得力がある。のちに8月には『十四経發揮』『経穴彙解』『類経図翼』などの古典の図版を終了し、昭和の経穴図資料として『鍼灸治療基礎学』(代田文誌・医道の日本社)、『臨床経穴図』(木下晴都・医道の日本社)もデータベース化し部員が自宅でも学校でも、どこでも検討できるようにインターネットに図版データをアップしておいた。

図版資料データベース化の作業をしてみてもじめて気が付いたことだが、『鍼灸孔穴類聚』(松元四郎平、私家版刊行・1927年)の経絡図は『経穴彙解』(原南陽・1807年)の経絡図を引用していること、『鍼灸治療基礎学』(代田文誌、医道の日本社・1940年)の経絡図は、『民間治療法全集第3巻・経絡・経穴刺激療法全集』(平田内蔵吉、春陽堂・1931年)の経絡図を引用していること等々があった。

また図版だけでなく骨度研究資料として沈形

(ちんとう)の『釋骨』もテキストデータベース化して部員に配布し検討資料とした。

第二次日本経穴委員会作業部会は5月立ち上げで7月末までに中国に検討事項の報告をしなければならないという、まったく時間のない状況ゆえ、いろいろアイデアをしぼった。5月に開設したメーリングリストなども苦肉の策だったが、やってみるとなかなか重宝で、まさに今の時代を象徴するような会議方式になっていった。

### 検討作業での成果

大塚の日本鍼灸会館での作業部会ではパソコンとプロジェクターで討議ということで紙の配布はほとんど行われることなく進められたが、これは実は北京の会議の時、中国側が行ったスタイルを参考にしたわけで、紙で配布された文書(MS WORD)をプロジェクターで次々と画面に写しだし、検討の必要なものについては討議し、修正を画面上で逐次加えていく、要検討については赤字で色を変えていく、討議が終わった時点でそのMS WORD文章をチェックし、メールで送られてくる、という方法であった。

作業部会でも同じようにExcelのデータファイルを用意し、画像も即座に見られるようにリンクを張ったファイルを用意し、部員は手元に何冊もの参考資料を置くこともなく、また資料の何ページかを索引で探すことなく、瞬時にチェックできる環境を作り、検討事項に最大限の時間をかけられるようにしていったのである。

### 最後に

京都の会議は前回と同じく中国側から事前にメールで送られてきたファイル(3カ国同意経穴292穴の位置と取穴の草案)をもとに前回と同じように中国側がすすめていくのであろうと思っていた。しかし議長の王雪苔氏の「日本側の非同意経穴の検討からいく」という一言で状



日本メンバーの面々

況はガラリと変わり、今まで委員会が検討してきた資料が公開されることになった。これは驚きで、結局3日間こちらでパソコンの操作をしなければいけない状況となり、あわてて、連日、深夜といわず早朝も、休み時間も使いプロジェクターに見やすい形で文字を大きくし、レイアウトを変え、Excelファイルを修正しなければならなかった。結果として、ここでも3カ国の経穴部位の表現なども画像を見ながらお互いチェックできたのは幸いで、4月からの苦労が実を結んだ。

蛇足だが、おそろしい無理難題をにこやかに優しい声で次から次へと要求する形井委員長はじめ、学識は言うに及ばず段取り、事務処理能力一切をお持ちの篠原副委員長、経穴のことなら何でも知っている浦山先生、鋭い突っ込みで議論に拍車を駆ける河原先生、落ち着いて冷静に判断を下す坂口先生、常に和を取り持ち議論の調整役をする香取先生、皆なかなかの御仁、このメンバーなら経穴標準化は“まとめられる”と確信した次第である。

## ■ V. 京都会議の報告 (坂口) ■

10月12日 8時30分、参加者はJR山陰線園部駅に直結の宿泊ホテル前からチャーターされた



バスで会場の明治鍼灸大学に向かった。早秋の嵯峨野路を走りながら、韓国側の通訳を務める金賢珍氏が車窓に映る景色を見て、韓国の田舎町にそっくりだと懐かしんでいた。9時、バスは会場となる同大学8号館に到着した。会場はコの字状に配され、前面スクリーン横にWHO西太平洋地域事務局伝統医学諮問官の崔昇勲氏、WHO側の英語担当者のナイゲール・ワイズマン氏が座り、スクリーンに向かって右側から中国側のアドバイザーの王雪苔氏、黄龍祥氏、司徒穩氏、中央に日本側のアドバイザーの形井秀一氏、浦山久嗣氏、小林健二氏、左側に韓国側のアドバイザーの李恵貞氏、金容爽氏と姜成吉氏、オブザーバーの任允卿氏、がそれぞれ着いた。通訳として、金賢珍氏、斎藤宗則氏、石崎直人氏が左後列に着き、少し離れた最後列に日本側のオブザーバーとして篠原昭二氏、河原保裕氏、坂口俊二氏が着いた。プレスは、(株)医道の日本社から専務取締役、東京支社長の山口泰宏氏、『医道の日本』編集長の石井利久氏が出席した。

オブザーバーであり今回の会議受け入れを担当した篠原氏の進行で開会のセレモニーが始まった。最初に崔氏が今回の会議の意義と重要性について挨拶した。その中で、北京の日本大使館からの中国側の参加者へのビザ発行が遅れ、参加が危ぶまれた点について話され、『医道の日本』がマニラと北京での過去2度の会議を口絵で紹介した記事をFAXで日本大使館へ送ったことで、今回の会議の重要性が理解され、ビザ発行が間に合ったと、医道の日本社に最大級の感謝を述べた。次いで明治鍼灸大学学長、栗山欣彌氏から歓迎の言葉が述べられ、その後、明治鍼灸大学の建学の精神を謳ったモニュメント前で記念撮影を行いセレモニーは終了した。

撮影終了後、8号館に戻り、検討に先立ち崔

氏が今回の議長として王氏、副議長として形井氏、レポーターとして姜氏とワイズマン氏を候補に上げ、全会一致で承認された。その後、各参加者の自己紹介があった。

会議進行については、議長が今回の議案として、「不同意穴92穴の部位・取穴法の検討」を第一にあげられ、部位・取穴の3カ国同意を目指し、表現の相違や解剖学的表現については、改めて検討することとし、会議の順調な遂行を促した。

10時45分、会議開始。いざ会議が始まると各国というよりは、日本対中国・韓国という議論場面が多く、午前約1.5時間の議論では、数穴の同意に留まった。昼食後、参加者は大学構内を少し散策し、気分をリフレッシュして午後の会議に臨んだ。午後からも活発な議論が展開されながらも、約4時間の検討作業で同意できたのは午前と合わせ26穴であった(17時15分終了)。

17時30分からバスで会場を移し、18時から第二次日本経穴委員会主催の歓迎会が栗山氏、全日本鍼灸学会会長で、第二次日本経穴委員会運営委員会を立ち上げた矢野忠氏参加のもと、盛大に開催された。参加者は懐石料理の美しさと細やかな技術、味に満足している様子であった。特に中国、韓国の参加者は、料理のお品書きに興味を持ったようで、1枚ずつ持ち帰った程だった。また料理ばかりでなく、参加者のスピーチでは、韓国側が日本語で日本側が韓国語で、中国側が日本語で挨拶する場面もあり、大いに盛り上がった。

ホテルに戻ってからも翌日の会議に向けての打ち合わせをする声が夜遅くまで聞こえていた。また、オブザーバーの記録を中国、韓国側と確認をしながら、ワイズマン氏が英訳し、会と並行して、WHOの議事録作成の作業が夜遅くまで続いた。日本側も3カ国の同意経穴から

表1 今回検討された非同意経穴の一覧

手太陰肺経 (5)	天府	俠白	尺沢	太淵	魚際															
手陽明大腸経 (6)	合谷	温溜	曲池	肘髎	臂臑	肩髃														
足陽明胃経 (16)	頰車	頭維	人迎	不容	承滿	梁門	水道	歸來	氣衝	髀關	伏兔	犢鼻	三里							
	豐隆	解谿	衝陽																	
足太陰脾経 (5)	大都	太白	公孫	箕門	衝門															
手少陰心経 (1)	少海																			
手太陽小腸経 (1)	天窓																			
足太陽膀胱経 (12)	睛明	眉衝	曲差	絡却	天柱	殷門	委陽	秩辺	飛揚*	僕参	金門	京門								
足少陰腎経 (6)	湧泉	然谷	照海	水泉	交信	築賓														
手厥陰心包経 (4)	天泉	曲沢	勞宮	中衝																
手少陽三焦経 (4)	中渚	四瀆	肩髎	瘰脈																
足少陽胆経 (22)	額厭	懸釐	曲鬢	懸顛	天衝	浮白	完骨	本神	目窓	正營	風池	日月	帶脈							
	五枢	維道	居膠	環跳	風市	中瀆	膝腰関	陽交	外丘											
足厥陰肝経 (6)	膝関	曲泉	陰包	五里	陰廉	期門														
督脈経 (4)	長強	痙門	神庭	水溝																

注) 飛陽の陽は揚の字に統一することとした。

色字の経穴については、表現ではなく部位の再検討を行うこととした。

の検討を予想していただいただけに、結果、非同意穴から会議が始まったことに戸惑いを感じながらも、2日目に向けて意見調整を行った。

13日の会議は、第二次日本経穴委員会の運営委員の川本正純氏の参加を得て、9時から始まった。最初に、ワイズマン氏から12日の会議録の説明と確認がなされ、その後、12日に続き27穴目からの議論が始まった。初日同様2日目も一穴ずつ、日本側が中心に非同意穴の理由を述べ、それを受けて中国、韓国側が意見を述べ、同意案を模索する方法がとられた。午前3時間、午後4時間の議論で37穴の議論を終えた(17時15分終了)。昼休憩には当初予定にはなかった施設見学を韓国側が熱心に申し入れ、約30分という短い時間ではあったが、東洋医学研究所を中心に見学ツアーが急遽組まれた。韓国側のモチベーションの高さには敬服した。2日目も無事に終了し、17時30分に場所を移動し、18時から明治鍼灸大学主催の歓迎会が開催され、中国料理が振る舞われた。

3日目は9時に始まり、11時20分までの間に

29穴の議論が終了し、非同意穴92穴全ての議論が一応終了した。その後、昼食をとりながら、次回の検討がなされ、第4回の会議は、2005年4月もしくは5月に韓国で開催されることが決定し、全ての日程が終了した。不同意穴92穴のうち、今回の議論では完全な同意には至らず、また実測が必要であると判断された経穴なども含めて15穴については保留とし、各国に持ち帰って再検討することとなった(表1)。

最後に、本会議を陰で支えていただいた明治鍼灸大学の教職員の皆様、特に東洋医学基礎教室の先生方には、会議のお茶などの準備、ビデオ記録、突然依頼した書籍や資料を早急に準備していただき心より感謝する次第である。

## VI. WHO京都会議に出席した 印象 (河原)

京都に着いて

10月11日11時過ぎに京都駅に降り、久しぶりの京都を感じる間もなく新幹線ホームから一番離れたホームへ急いで移動。今度は山陰線に乗

り換えコトコト電車で揺られ1時間。到着地は園部駅。駅の改札通路へ出て、どこまでが駅構内で、どこからがホテルかわからないビジネスホテル・リーズナブルに到着した。一息するまもなく、ホテル喫茶室にて会議を開催した。内容は翌日から3カ国で検討されるであろう3カ国同意経穴の日本案の最終確認である(この時までは日本としては当然、3カ国同意経穴の確認作業から入っていきだろと考え準備を進めていた。これが後になってとんでもないことになるのだが…)

会議終了後、ホテルで夕食をとっている間に次々と各国の先生方の到着となり、入れ替わり立ち代りの忙しい夕食となった。各先生方への挨拶も終わり、夕食も済み、部屋でゆっくりするか、などと考えていると、形井委員長より201号室で22時より日本の会議を再開しますとの優しいお言葉…。結局初日は夜中の12時過ぎまで会議を行い、万全の体制で翌日からの会議に臨んだのであった。

#### 会議場

広大な山々の中に聳え立つ明治鍼灸大学校舎の一角(第8号館4階)でこのWHO非公式会議は開催された。設備の整った素晴らしい会議室である。

会議は篠原先生を始め、明治鍼灸大学の先生方のお陰で国際会議に相応しい環境で行われた。スタッフの先生方の配慮はもちろん、会議中に急遽資料作成をした場合でも対応は速く、また必要な文献が欲しい時にはすぐさま図書館より探し持ってきて頂けた。複数のパソコンを切り替え映し出せるプロジェクターなど至れり尽くせりの中での会議だった。

こんな素敵な環境、立派な設備の中で勉強が出来る学生はなんて幸せなのであろう。

#### 会議本番

会議は非常に友好的な雰囲気の中で進められたが、いざ問題提起が起こると非常に熱く討論が繰り広げられた。経穴の部位、表現それぞれ意としているところは同じでも、お国の事情(教育の問題、臨床の問題)を抱えており、一筋縄では同意できないことも多い。ここで印象に残っている論議を幾つか紹介する。まず中国で、足太陽膀胱経の飛揚穴を論議している時、部位表記の問題で、日本・韓国は外果の上7寸で腓腹筋の外縁という意見を出すが、中国は外縁という表現は適していないと反論。外縁というと縁(フチ)全体を指すので良くないという。我々は外果の上7寸で高さを示しているのだが、どうも納得して頂けない。結局は腓腹筋の外縁か、腓腹筋とヒラメ筋の間かという問題、また外縁を言う表記をどうするかという問題、外果の上なのか、崑崙穴の上なのかという問題が残り各国で再検討することとなった。また韓国の問題では、今まで日本・韓国は前腕の長さを1尺とした骨度法を用いていたが、前回のWHO北京会議で前腕の尺度は1尺2寸(12寸)と定められた。手少陽三焦経の四瀆穴の部位を確認していた時、今まで四瀆穴は手関節の上5寸と定めていたが、古典の記載を尊重し、肘から下5寸ということになった。今まで10寸で考えていた時はそれでも良かったのだが、12寸となったため部位に2寸の差が生じてくる。また手厥陰心包経の郄門穴は手関節から上5寸と定められた。本来、四瀆穴と郄門穴は表裏で同じ位置にあったのだが、2寸ずれることで、四瀆・郄門への透刺ができなくなると韓国が主張。確かにそうだ。もし教育上もしくは臨床上、四瀆から郄門への透刺が必要であれば、例えば前腕中央透刺とかに名前を変えなければならない。それぞれの都合、立場をこれからも考慮しながら

ら検討してゆかなければならない。

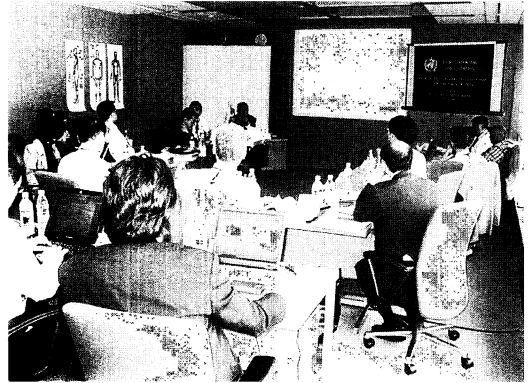
今回の会議は、92穴の非同意穴の検討であったが、一応3日間で一通りの意見交換はなされ、大きく一步を踏み出した。しかし、再検討の経穴が多く出ているのも事実であり、次への一步のためにさらに努力しなければならないと痛感した。

また、今回の会議で感動したのは、会議中に韓国が示した経穴の図版である。人体の輪郭の中に、骨と筋肉が透けて描かれており、その中に経穴のポイントが示されている。輪郭だけ、骨だけ、筋肉だけというものよりもはるかにわかりやすい。日本も中国・韓国に誇れる経穴テキストを作成しなければ…と密かに思っているのは、私だけでなく経穴委員のメンバー全員ではないだろうか。

#### 臨時会議？

会議、レセプション後に毎晩201号室集合となるのだが、今回の会議で日本側は3カ国の同意経穴の確認作業を行うと考えていた。しかし蓋を開けてみれば王雪苔議長の一声で非同意経穴の検討から開始された。予定変更となったため、毎晩、非同意経穴の日本案最終確認作業を行わなければならなかったのである。ある先生が近くのコンビニでお酒を仕入れて来てくれたのだが、それを口にするこもなく深夜まで会議は続くのであった。

また、今回の会議録は英文にてWHOに報告されるのだが、WHOのナイゲール・ワイズマン氏が議事録を作成するために、我々は韓国の先生と一緒に立会い、解説を行った。これも深夜に及ぶ作業で、ここでも1つ話題がある。ワイズマン氏は中国語と英語の専門家、鍼灸師・中医師・漢医ではない。文章を作成していく上で、経穴の部位・取穴法と、1穴に対し同じような文章が2つ出てくるのだが、部位と取



会議の様子

穴法の違いを説明するのに苦勞をした。ワイズマン氏曰く、「部位がわかれば経穴は取れないのか？」部位表記は解剖学的に、また基準点、基準経穴を用いて表すのだが、取穴法はその部位（経穴）を臨床時にどのように求めるかの方法である。当事者でないと理解し難いことがあることを改めて感じた。

3日間の会議であったが、非常に多くの事を体験でき、素晴らしい先生方と有意義な時間を過ごさせて頂いたことに感謝したい。

#### ■ VII. 今後の課題と進路 (形井) ■

さて、京都會議後は、どのように作業が進んでいくのかを述べておこう。

##### 今後の会議の予定

①2005年3月

第1回ワーキンググループによる部位の検討—北京

②2005年5月

第4回国際経穴部位標準化に関する非公式諮問会議。経穴部位標準化最終案の決定。—韓国

③2005年7月もしくは8月

第2回ワーキンググループによる英訳最終案作成。—マニラ

④2005年から2006年にかけて  
最終案を世界各国の学会等に検討依頼

⑤2006年3月  
国際経穴部位標準化に関する公式会議一場所未  
定(日本開催も可能)

#### 今後の内容検討の進め方

上記日程からも分かるように、2005年3月には、非同意穴と同意穴の両方が詳細に検討され、また、図譜の作成のための検討等も行われる。

そのため、日本側も準備を急ピッチで進めなければならない。2005年2月中旬までには各国の最終案を提出することになっているので、今後の作業部会の作業日程も詰まったものになる。

また、標準化された経穴の図書、図譜などの作成は、出版社に依頼することになるので、出版の形態をどのようにすればよいかが問われる。

#### 各国の取り組み

こうして、国際標準が定まると、各国は、この標準を1つの座標軸と考え、この基準となる座標軸を学生や臨床家に示すとともに、各国独自の経穴の研究・検討が行われることになるに違いない。この標準化は、各国を縛るものではなく、不明確・不統一な位置で論じあっていた経穴を統一した位置で論じ、さらに、独自の経穴部位の優位性を明確に示すためにあると考えると良いのではないだろうか。

日本国内でそのような研究が百出することを期待するものである。

## ■ VIII. 補 遺 (形井) ■

最後に、第二次日本経穴委員会の運営・活動

について、補足をする。

①第二次日本経穴委員会発足：2004年4月25日

②運営委員会構成団体(5団体)：全日本鍼灸学会、日本鍼灸師会、東洋療法学校協会、日本理療科教員連盟、日本東洋医学会

③オブザーバー参加団体：日本伝統鍼灸学会、日本東洋医学系物理療法学会

④協賛企業・個人：医歯薬出版社、医道の日本社、セイリン株式会社、せんねん灸株式会社、丹沢章八(東洋鍼灸専門学校長)

⑤経穴標準化検討作業部会委員：形井秀一(委員長、全日本鍼灸学会)、篠原昭二(副委員長、全日本鍼灸学会)、浦山久嗣(委員長推薦)、河原保裕(日本鍼灸師会)、香取俊光(日本理療科教員連盟)、小林健二(日本東洋医学会)、坂口俊二(東洋療法学校協会)

⑥検討作業部会：合計7回(5月~10月)、会合は日本鍼灸会館(6回)と園部(1回)。

⑦委員会への意見：3件……参考資料をいただいたもの2件、活動のあり方のアドバイス1件。

⑧3カ国経穴検討内容：3カ国合意穴……269穴、非合意穴92穴。

(上記はすべて11月15日現在)

<協賛企業および個人には、協賛金を拠出いただき、活動をご援助いただいています。ここに、深くお礼申し上げます。なお、今後もオブザーバー参加団体の参加と企業・個人からの協賛金の拠出はお願いいたしますので、ご協力よろしくお願ひします。>